

めざせ！ 苗場山麓ジオパーク

Vol.

8

振興協議会だより

〔発行日〕平成26年6月25日

〔発行〕めざせ！苗場山麓ジオパーク推進室

振興協議会 第2回総会

去る6月3日に、めざせ！苗場山麓ジオパーク振興協議会を開催しました。基調講演では、野尻湖ナウマンゾウ博物館の近藤洋一先生から「津南町で発見されたゾウ化石と化石の産出するジオパーク」の題目で興味深く魅力あふれる話を伺いました。それによれば、出土層位や出土状況が克明に記録されている貴重な臼歯化石であり、その記録から約110万年前の帰属年代を求めることができるそうです。それらの類例が長岡市越路などにあり、ゾウが歩いた道があったのか？というロマンあふれる講演でした。



講師の近藤洋一氏

協議では、今までの事務局活動の報告、そして平成26年度事業と予算案を提示し、承認を頂きました。協議の中では、「見やすい看板」、「文字の大きさを検討した看板」ということで観光客の視点に立った看板作成と景観にも配慮するべきとの意見が出されました。事務局としては、景観に配慮し必要最低限の看板設置を想定し、基本的にはナビアプリを利用した端末解説の導入を考えていることを報告しました。



総会の様子

次いで、各部会の活動を以下の内容で報告いただきました。

資源探索部会

中津川溪谷沿いにあった「幻の草津街道」を探求することを目的に聞き込み調査と反里口から見玉までのルート探索が始まったことが報告されました。また、見玉地区における1日滞在を想定したツアールートに草津街道を含めて検討し、その一部をガイド養成講座で歩いたこともスライドを交えて報告いただきました。さらには、その一連のルートに組み込まれる穴藤地区に残されている軌道敷跡や鉄橋橋脚跡、古型マンモス臼歯化石出土地点、第2期苗場溶岩層（流下の様子）の素晴らしさも報告されました。

広報部会

「ウチとソトの両方への広報」を大切にしながらも、これから現地審査に向けて「さらなるウチへの広報」に力を注ぎたい旨の報告がありました。その主軸であるホームページの各ページをスクリーンに大きく映し出して説明を頂きました。さらには、ロゴ作成や写真コンテストの開催などを進めるにあたり、商標登録や著作権などの課題が浮上したことが説明されました。そして、その課題に対する学習会を開き作業を進めると同時に必要な費用に対する予算化についての要望も出されました。

商品開発部会

「大地・雪・縄文」をコンセプトとして打ち出し、食の開発やツアー商品開発などの議論が展開されている報告がありました。特に、苗場山麓だからこそ取り組むことのできる「スノーシューを使用した残雪期のジオツアー」や「信濃川を下るラフティングジオツアー」の紹介がありました。また、大地と生態環境を背景に展開した縄文文化と絡めた「トチノミ」や「アンギン」などから派生する商品開発の必要性が説明されました。

意見交換では、「雑魚川」や「石落し」などの地名についての出典問題や、地元の呼び名を大切にする視点など事務局として拝聴すべき大切な場面がありました。これらについては慎重に対応すべき視点に立ち戻り、古老への聞き込みや古文書調査を実施したいと考えています。

トピック 小滝の運河跡

栄村小滝の中沢健吾さんから千曲川の四曲（よつまがり）に運河の跡があるという話が舞い込みました。中沢さんによれば、『津南町史通史編 上巻』の第四章第三節四の「善光寺町厚連と千曲川通船」にその詳細が記載されていると教わりました。

町史を紐解くと「信越天領米の輸送や飢饉の時の救援物資の輸送」などの「内陸輸送の主体が河川水運であっただけに利用価値は大きかった」と評価されています。そのため千曲川水運を新潟湊まで延長する計画が、敏腕代官らによって立案されま



川原に残る運河跡の様子

した。その後、善光寺町に住む厚連が文政 11（1828）年に掘削を出願し、同年に工事が開始され、石割り技術をもつ黒鍛冶者を江戸から呼び寄せたようです。途中の中断はあったものの、10年後の天保9（1838）年に岩石掘削普請が完成し、信州西大滝から越後岨滝地先にある割野新田までの荷船乗船見分が行われたといえます。その後、弘化4（1847）年の善光寺地震で掘削は使用できなくなったようです。

『小布施町史』によれば、「下り荷物は、のしたばこ・絞りたばこ・種油・胡麻油・小杉紙・糊入紙・山中紙・木綿布・たが竹・丸竹」が積まれ、「上り荷物は、五泉茶・村上茶・鉄・塩鯛・塩石口・磨練（ミガキニシン）・鮭塩引・いなだ・烏賊・昆布・鰯（スルメ）・琉球莞莖（カンエン）・瀬戸物類・塩干鯛・藍玉（アイダマ）・傘」が運ばれたようです。

このように江戸時代後半における北信地方の物流は、通船の役割が大きく、そのため市河谷にある小滝の四曲などが弊害であったために厚連が中心となり掘削普請を進めましたが、この厚連なる人物についての情報が不詳です。



円礫を割るための楔痕

さて、このたび案内を受けた四曲の川原は、魚沼層群のうちの凝灰円礫岩層が掘り窪められ運河状の堀割が確認されました。また、掘削斜面には、上り船を押すための足掛け穴が連なって掘られてありました。さらに現本流との交差付近には、楔孔が十字状に開けられた円礫も確認されました。

まさに、地質環境と近世経済史が交差したジオサイトです。さらに近傍の常慶院や仙当城跡・善光寺街道（志久見街道）などを含めたジオエリアとして高く評価されるものです。

COLUMN

大地の息吹と
現代を結ぶ

大地の不思議 ～風穴～

私が最もオススメのジオスポットを紹介します。

案内した方もとても喜んでもらえる場所、それは「山伏山の風穴」です。冷たい風が吹き、夏でも雪が残る場所があります。それが「風穴」です。風穴は、ガレ場に形成された天然の冷蔵庫です。

特に津南町指定文化財に指定された山伏山の風穴は、涼しい環境を利用して明治時代から昭和初期まで天然の冷蔵庫として、主に当時の手工業の産業であった養蚕で、蚕の卵を冷蔵保存する場所として活用されていました。その当時の面影が現在でも残されています。他にもこの場所は夏の避暑の場所としても使われていました。

暑い夏の日はまだ雪が残る風穴を訪れてみてはいかがでしょうか？

特に7～8月がオススメです。めがねの方は曇るのでご注意ください。



めざせ！ 苗場山麓ジオパークのジオサイト

57 の見どころを随時紹介していきます

七ツ釜（国指定天然記念物）



所在地 十日町市・津南町 **種別** 地質

約700 万年前から500 万年前には律沢層と西田尻層が堆積しました。律沢層は、日本海が埋め立ていった地層で泥岩・砂岩の互層からなり、清津峡の出口や清津川支流の釜川に分布します。西田尻層はやや深海に堆積した泥岩層や凝灰岩層、溶岩からなり、中津川穴藤や釜川の田代・所平地域で見られます。釜川の柱状節理（安山岩性）は、この時代にマグマが固まってできたもので釜川左岸を覆い尽くしています。

津南町と十日町市の境界に位置する釜川は、その左岸が津南町で、右岸が十日町市です。

この釜川には七つの滝淵があり七ツ釜と呼ばれています。馬場村（現：十日町市馬場）の太田新右衛門が、釜の主である大蛇との約束を破り、釜に投網を投じたところ、大蛇は怒り、新右衛門の家に身体を七回り半巻き付けました。その恐怖で新右衛門は狂い死したという伝説が残されています。この昔話の舞台となった七ツ釜は、一番滝、二番滝、三番滝、ゆり釜、手洗釜、赤淵、長淵が約1km に亘って連なる渓流地です。

江戸時代の文人、鈴木牧之は名著『北越雪譜』の中で「田代の七ツ釜」として取り上げ、伊勢神宮から配布されるお祓いのお麻を入れた箱「御号」に見たてて柱状節理を観察して説明しています。

小松原湿原



所在地 津南町・十日町市 **種別** 自然

小松原湿原は、苗場山の第Ⅲ期火山活動に伴う溶岩の上に形成した高層湿原です。高層湿原とは、高山や高緯度地方に多く低温・過湿で塩類の乏しい貧栄養の所にできる湿原です。この湿原は下の代・中の代・上の代と呼ばれる3段の地形からなり、その標高は約1,350mから1,570m、徒歩90分の遊歩道沿いに池塘が点在します。高層湿原が形成される過程で、堆積した泥炭層の隙間が降水で自然にゆっくりと満たされた場所ができます。これが池塘とよばれ、モリアオガエルやムカシトンボなどが生息し、小さな池のように見えます。近年、堆積物調査により、1万年前頃から池塘形成が始まったものと考えられ、その背景に多雪化があると推測されています。

湿原には、ヒメシャクナゲ・ツルコケモモ・サラワン・トキソウ・ワタスゲなどが群生し、雪どけ後の6月後半～7月のほんの1ヶ月程の繁殖期に一齐に花を咲かせ、花畑が広がります。その周囲にはベニサラサドウダン・ミネカエデなどの低木層が形成されています。

また、歴史文化的には3段の平坦地形に木曾義仲の屋敷があったと伝えられ「木曾屋敷」なる地名が残されています。

小松原湿原は、新潟県自然環境保全区に指定されています。

※地質学の学説は複数あり、現在も研究が続いています。そして、本地域の調査研究がこれからも行われる必要があります。



なじょもん塾 第4回

なじょもん塾第4回（平成26年5月21日）は、湯沢町議会議員で雪国観光圏事業などに尽力されている高橋五輪夫（たかはしいわお）さんをお迎えしました。「雪国という地域の津南と湯沢について」と題しお話を頂きました。

雪国観光圏事業のポリシーや事例などを分かりやすく説明頂く中で、「ブランド」そのものが、現在、（仮）苗場山麓ジオパークが取り組もうとしているジオ・エコ・カルチャーの保全と利用活用の中にあるはずだと語られました。そしてすなわち、それが地域を照らす光であることと、そのまばゆい光の中にこそ「観光」をブランド化する宝があることを眼を輝かせて話して頂きました。

また、ご自身が経験された海外のリゾート地の事例なども写真をまじえお話をくださり、地域資源を活かしたオリジナリティある町づくりの重要性を感じました。



講師の高橋五輪夫氏

今後のスケジュール

- | | |
|------------|---|
| 平成26年6月21日 | 第8回ジオパークガイド養成講座「マウンテンパーク津南・河岸段丘」
9:00～15:30 集合：マウンテンパーク津南 ロッジ前 |
| 6月27日 | なじょもん塾 第5回 講師：高橋要氏（「にいがたイナカレッジ」インターシッププログラムにて、地域づくり活動に参加された経験をもつ） |
| 7月19日 | 第9回ジオパークガイド養成講座「のよさの里・鳥甲山の火山活動」（予定） |
| 8月4日～5日 | 日本ジオパーク現地審査（予定） |